

宋代禅籍逸書序跋考

石井修道

一 はじめに

唐代中期に確立した禅宗は、個性ある多くの禅者を輩出したが、それらの禅者の言行を記録した語録類が編集されるに至った。語録の編集は、唐代にも存したが、現存する唐代の禅籍も、ほとんど宋代に再編・重編された場合が多い。今回この論文で問題にしようとするものは、「宋代禅籍」とあるから、印刷史上において最も古い時代に属し、かつ貴重な宋版とよばれる典籍類も当然問題にしなければなるまいが、そのすべてをここで問題としようとするのではない。一応、五代より宋代の十世紀から十三世紀頃までに活躍した禅者の語録や燈史類を中心とするもので、宋代禅者の禅籍ということに限定したい。しかも「逸書」ということになれば、十二世紀以前の禅籍は、現存することはきわめて限定される訳で、宋代の禅籍の逸書は非常に多いであろうし、現在知られてい

るものでも、再刊や重刊もあって、初刊本等も逸書ということもできるのであるが、ここでは書誌的な典籍史を目的とするのではない。ここで問題としていきたいのは、目録や伝記類で名前のみ、あるいは存在のみが知られていながら、内容が全く不明である場合、その内容の解明にわずかなヒントになりうるかもしれないということで、逸書の「序跋」を紹介しようとするものである。つまり宋代の禅籍の伝承が知られるものは、ここでは除外することにする。それぞれの禅籍の一つ一つについては、古い形態から伝承形態および異本校合などの研究がなされねばならないし、また一部分その研究成果も徐々に発表されている。

以上のような限られた問題を、さらに宋代の文人の文集に収められたものを中心に収集したのであるから、序跋類はいろいろな所で散見できるし、文集も宋代は沢山があるので、網羅できなかつたものは、今後補正していきたい。この論文で

は駒沢大学図書館に存する四部叢刊、四庫全書珍本初集～第六集所収の文集および『宋人伝記資料索引』（鼎文書局）の指摘を中心にして、大学に存しない文集は、主として静嘉堂文庫の文献によつた。内容的に「序跋」といっても、必ずしも刊行を目的としないものや、個人の所持本の序跋、あるいはわずかな法語や贊に対する序跋と思われるものもあり、その中で内容不明のため語録・燈史類と思われないものは私見によつて削除した。その点の補正も今後の課題としたい。この論文によつてあるいはその存在が知られるようになるかもしれないし、また逸書の発見の機会ともなるかもしれないが、そのように本文内容が知られるのに役立ちうるならば、私の望外の喜びであるといえよう。心からその実現を願つて止まないものである。

二 序跋の紹介と解題

序跋の全文を紹介し、今は校定等を行つていないので、駒沢大学図書館所蔵本には、便宜上その図書番号を示しておいた。また序跋には全文にわたつて句読点を付したが、力不足のため意味不明の部分がわずかに残つた。箇々の研究をする時に改めるべき問題もある。また解題は紙数の関係もあり、できるだけ簡単にし、序跋の紹介に努めた。それ故に序跋の撰者の紹介や語録類の禅者との関係などは十分でないところ

も多い。当然その撰者の研究が箇々に行われなければならぬし、またその研究は容易であるとはいがたいであろう。この論文で取りあげた序跋の分類を示せば次のとおりであり、順序は序跋の撰者や本文の編者・撰者を参考にして排列し、編者・撰者の名および諱と序の成立年次のわかるものは示した。

一 燈史類

- (1) 仏祖同參集序（道原）
 - (2) 禅源通錄序（拱辰）（一〇七一）
 - (3) 伝燈玉英節錄序（胡寅）（一一五二）
 - (4) 真和尚紹興伝燈序（惠真）
 - (5) 宗門会要序（智朋）
- (参考) 書伝燈錄後（蘇轍）（一一〇八）

二 語録類

- (1) 曹洞宗
- (6) 般陽集序（道楷）（一一一五）
- (7) 雪峰真歇了禪師一掌錄序（清了）（一一三四）
- (8) 大陽明安禪師古錄序（警玄）（一一三三）
- (9) 雪峰慧照禪師語錄序（慶預）（一一三八）
- (10) 詔雪屋詩集序（正詔）
- (11) 雲門宗
- (12) 蘇州承天寺永安長老語錄序（崇智）（一〇六五）
- (13) 福州西禪暹老語錄序（道暹）
- 印禪師語錄序（慧印）

- (14) 仏鑑大師語錄序（惟忠）
 (八) 臨濟宗黃龍派
- (15) 慶禪師語錄叙（昭慶）（一一〇八）
 (16) 磐禪師語錄序（円磐）
 (17) 宗禪師後錄叙（法宗）
 (18) 東林集叙（常聰）
 (19) 雲居祐禪師語錄序（元祐）
 (20) 宗禪師語錄序（道宗）（一一〇九）
 (21) 仏印清禪師語錄序（智清）（一一三八）
 (22) 慧和尚四會語錄序（居慧）（一一五七）
 (23) 福州仁王謨老語錄序（謨）
 (24) 持老語錄序（持）（一一七九）

一燈史類

(1) 仏祖同參集序

昔如來於然燈仏所、親蒙記勗、實無少法可得、是号(大カ)太覺能仁。事之因緣、出現五濁之世。奈何根器各異、機感有殊、由是開三乘權實之門、設一時頓漸之教、具偏円半滿之義、分悟証伏斷之差。演之為十二部經、廣之為百千万頌、隨類各解、始雖自於一音、達本忘言、終乃同於二月。故純陀末供之後、鶴林示滅之辰、以正法眼、付大迦葉。內伝真印、外授信衣、作世導師、為仏嫡子。凡二十七世、至達摩大師、哀此土之人、昧即心之理、分別名相、而不已類、大海以算沙、攀緣生滅而為因、但認

賊而作子。聿來震旦、宴坐少林、不事語言、不立文字。既得人而伝付、乃趣寂以返真、是為東方之初祖也。自爾本系相承、旁支列出、敷華結果、五葉之譏可徵、繞燄分輝、千燈之照弥廣。至於出離生死一門、証於涅槃、誘導遇迷、万行以之差別、由二祖而下、迄至於今、以諸夏之利根、叶西土之懸記。得道之者、實繁有徒、其或指掌盱衡、乃了知於風力、搖唇鼓舌、即悟入於言枢。或針芥相投、金鑑力弁、或經塵將破、啐啄同時。示現方便、以既殊、但遭因緣、而亦異。咸有軌迹、著為筌蹄。譬諸三藏之文、結集於鉢羅之窟、七仏所說、秘藏於娑竭之宮、苟撰述之無聞、使後來而安仰。先是諸方大士、各立宗徒、互頤師承、迭存語錄。圭山患其如是也。會合衆說、著為禪詮、融通諸家、円成一味、蓋祖門之能事畢矣。歷歲弥久、部序僅存、百卷之文、不伝於世。東吳道原禪師者、乃覺場之竜象、寒天人之眼目。慨然以為祖師法裔、頗論次之、未詳草堂遺編、亦嗣統之孔易、乃駐錫輦轂、依止王臣、購求亡逸、載離寒暑。

自飲光尊者、訖法眼之嗣、因枝振葉、尋波討源、乃至語句之對酬、機緣之契合、靡不包擧、無所漏脫、孜孜纂集、成(大カ)二十卷。理有未顯、加東里潤色之言詞、或不安、用春秋筆削之體、或但存名号、而蔑有事迹者、亦猶乎史記之闕文。或兼採歌頌、附出編聯者頗類、夫載籍之廣記、大矣哉、禪師之用心、蓋述而不作者矣。嗚呼、法界無際、衆生無邊、凡厥有情、莫非同體、終日円覺、触目真如、而迷失妙明、增長虛妄、分別影事、

牽制於六塵、積集苦因、流浪於三有、善知識愍、其如是也。不歷事相、直指本源、但一念不生、即三際俱斷、十方消殞、諸聖現前、識珠在衣、匪從他得、如金出鉢、豈復重為、円頓之門、妙如此矣。稽所証之道、然後知原師也、生如來家、真法王子、究所詮之理、頽カ然後明斯集也、了第一義、真最上乘。

當使末法之年、初心之頽、去聖逾遠、開卷得解、一彈指頃、齊肩古仏、不起於座、入涅槃、雖利益之、若斯於滅度而無取。即知、施七寶而滿刹土、徒為漏業之資、化二乘而等河沙、適重敗根之罪。師之法施、豈思議之所及哉。新集既成、咨予為序、輒摭梗概、冠於篇首云耳。（「武夷新集」卷七—十八丁右（一〇〇七年自序）○丁右）（靜嘉堂所藏本「新刊浦城遺書」所收）

楊億（九七四—一〇二〇）の『武夷新集』（一〇〇七年自序）二十卷に所収される一文である。『仏祖同參集』は法眼宗の承天道原（源・元）の編になる。この序については椎名宏雄氏が「朝鮮版『景德伝燈錄』について」（駒沢大学仏教学部論集第七号）で紹介され、同じ楊億の「景德伝燈錄序」と比べ、『仏祖同參集』が『景德伝燈錄』の原題名であろうと推測されているが、椎名説は興味ある解釈である。ここでは内容が伝燈錄と考えられても、原題名が異なるため載せておいた。

（2）禪源通録序

楞伽阿跋多羅寶經、乃先仏所説、第一真實妙義、故謂之仏語心品。祖師達磨、以付二祖曰、吾觀震旦所有經教、惟此楞伽四卷、可以印心、祖祖相付、傳為心要。後至東山、以為楞伽義理深

微、非淺智粗心所能窺測故、每用金剛般若經、開示衆等、令其易解。逮于曹溪、以大慈悲、一音演說、対答偈句、揭如日月。其所開導、直指本心、未嘗離楞伽自証智覺之大旨也。由是領悟者多、法周沙界。初二祖常言、此經四世之後、變成名相、深可悲哉。白衣止、不伝諸方、分化地、殊南北、名標頓漸。參學之流、各相祖述、道場相望、源流寛廣、去聖逾遠、時風益薄、堪任大事、根器誠難、然輕重不可欺於權衡方圓、不能出於規矩。但兎角龜毛、泥牛木馬、務為深隱、巧愈弥甚、名相之言、諒非虛示。初六祖教諸門人說法、必令先定宗旨。雖以三科起用、究竟一法尽除。故知、一問一答、豈苟而已。若其具無碍弁才、入淨圓三昧、隨其語默、仏法現前、緣與信合、事実稀有。故黃蘖禪師、每謂衆曰、江西會下、唱道之師、八十餘席、得大寂正眼、三兩人爾。則知、為世度門、傳仏法印、大善知識、豈易偶哉。自賓鉢羅窟、諸聖賢衆、相結集多羅等藏、其紀述之來尚矣。至于中華、則有蕭梁統法、元魏付法藏傳、以至于唐寶林・心要・祖堂等集。國朝傳燈錄、時代・師承・本末詳備。近吳興有具壽僧拱辰、道意純熟、禪寂為樂、再啓法筵、尋復捨衆、雖不顯談說、而示人聞修之法。雖無所作受、而為衆利益之事。故閱上以來、諸傳集錄、正其差訛、攬其精要、推明統本、總括橫枝。若網在綱、條目不紊、依於義不依語、依於法不依人。不離文字、示解脱相、徹照今古、乃無尽燈。又統法眼之後、至治平之末、達磨法嗣、通十有九世、

凡二十四卷、題曰禪源通錄。時熙寧四年正月望日。樂全居士安道序。(「樂全集」卷三三十一左~三三丁右)(四庫全書珍本初集駒岡032—20—254)

張方平(1007—1091)の『樂全集』四十巻に所収の一文である。編者の拱辰とは、『建中靖國統燈錄』巻八の達觀曇顥(九八九—一〇六〇)の嗣の湖州西余山拱辰(統藏經卷一三六—七〇d)であり、『五燈會元』卷十二の伝には、「師、祖源通要三十巻有り、世に行わる」(統藏經卷一三八—二二八a)と述べている。三十巻と二十四巻、『禪源通錄』と『祖源通要』が全く一致しない点に問題は残るとしても、両者が同じ書を指すことは間違いないものと思われる。この序文によつて『景德伝燈錄』の紹興二年(一一三一)に書かれた鄭昂(一一〇一—一五二)の跋の「右、景德伝燈錄は本湖州鉄觀音院に住する僧拱辰の撰する所なり」(大正藏卷五一四六五b)とある延祐三年(一三一六)本による伝燈錄が拱辰の撰ではないかという疑問は、氷解し、鄭昂の伝燈錄注目すべきことは、『統法(記)』・『付法藏伝』・『宝林(伝)』・『心要(集)』・『祖堂(集)』の名を載げ、特に印宗撰『心要』、近年高麗版の蔵外として発見された『祖堂』を記している点である。その他に序文の撰述年が熙寧四年(一〇七一)であること、伝燈錄が達磨下十八世までであったのが、十九世までとなり、治平(一〇六四—一〇六七)の末まで伝が存することがわかる。広燈錄が景祐三年(一〇三六)に完成して法眼派の動向をよく示しているが、この書が出現すれば、その点をさらに明確にするであろう。

(3) 伝燈玉英節錄序

學必有疑、疑必有問、問必資賢智、于我者、問非所疑、答不酬問与。夫不待問、而自告之此師、弟子之失也。伝燈錄所載釈子、以葛藤目之、其失在此矣。今獨取其敷揚明白者、庶易以考其是非焉。若夫談鬼怪、摹詩句類、俳戯如誑誕者、則尽削之。或詣予為蔽曰、曾不聞粗言細語、無非第一義、而于其間、妄生揀択、是豈禪意。予曰、以鬼怪詩句俳戯誑誕之說、相唱和于穿穴空籠混漾無實之中、是為遁詞、乃得法者、之所訶也。觀少林啓廸姪光、警發梁武、莫非的確要論。何有如末流蘿蔓、繆闕不可致詰者哉。雖然、此亦就其心声、而去取之、非宗其道也。夫意由心生、而意非心、心由性有、而心非性。今釈者之論心纔及意耳、其論性纔及心耳。是自名見性、而未嘗見性也。未嘗見性、于是以世界為幻、以性命為欲、以秉彝為妄、以事理為障。雖清淨寂滅、不著根塵、而大用大機、不足以開物成務、特以擎拳植払、揚眉瞬目、遂為究極、則非天地之純全、中庸之至德也。此在学者、慎思而明弁之爾。紹興庚午、予自休官中、謫置新昌。夏六月、息肩、既無書可觀。又不敢從事翰墨。城南二十五里、竜山寺、乃六祖太鑒^(大カ)故居、而亦無藏經、獨有四大部與玉英集。遂借而閱之、乃景祐大臣王隨、所撮楊億傳燈錄也。隨之意正、以麤言冗事、有混真詮。則予今之去取、仰睇前哲、可無愧矣。壬申夏六月己巳序。(「斐然集」卷一九一—六丁右~一七丁左)(四庫全書珍本初集 駒岡032—20—291)

胡寅（一〇九八—一一五六）の『斐然集』三十卷に所収された一文である。文中にあるように楊億が削定した『景德伝燈錄』三十卷をさらに景祐元年（一〇三四）に王隨が刪定して『景德伝燈錄』三集』十五卷を編し、後に入藏したものである。近年、山西省趙城县広勝寺で発見された金蔵で、『宋藏遺珍』に収められ、その後中華大藏經や柳田聖山主編の中文出版社の影印本でみることができ、篠原寿雄氏「王隨の玉英集刪定について—北宋士大夫の禪受容」（駒沢大学仏教学部研究紀要第十九号）の論文に詳しい。この序文は、胡寅が『伝燈玉英集』をさらに節録した時に書かれたもので、紹興二十二年（一一五二）に成るものであり、その内容からみるに節録の状況を述べたものといえるが、大慧下の曉瑩仲温の『羅湖野錄』巻上の「節本伝燈三卷」（続藏經卷一四二—一四八一-b）の刊行本に当るとも考えられる。伝燈錄が士大夫に受容される時に、節録されて用いられた場合が多く、網羅的な編集は個人の禪理解には不用であつたといえよう。

（4）真和尚紹興伝燈序

仏之一字、明心達性、修已脱塵、攝銳澄源、得大自在。故謂一大字因縁、又曰出世間法。山林之士、搢紳之家、隱迹遁名、警世離俗、先為一切軌則。以心印心、或介以自持、或通以接物、支分派別、未易以同異窺測、往往取正宗關鍵。諸方行解、從聞思修、至警地處、道成果熟、自然諸仏推出、豈資人挽引耶。是為本分衲子。或有仏者、謂心即仏爾。其於辛勤修持、亦余事爾。乃不謹細行、合聲同氣、不出戶庭、不親師友、放誕於口耳之學、以苟坐上之語、吁足怪也。不有宗匠、拈出要

領、寧接後學。嚴陵惠真禪師、悟向上機、佩毗盧印、六住大刹。徧參法席、經行勝地、求善知識、不憚夷險包笠之出、函丈鉢錫之勤、究竟法要、遂証己事。又會諸方真實之語、為一源、透徹之用、總緝宗派錄、為部秩。開人之天者、鋪張典則、開天之天者、廓達融通。指歸妙源、接引善類、名其書曰、紹興伝燈、凡廿卷。彼三燈固具皆前代耆宿。今全秩密載、乃本朝英遊、或宰輔貴近、垂紳正笏、侃然立玉墀之賢、或肥遁士、埋光鏟采傲、睨於風烟之表、一言半句、全提妙心、伝人間、皆所紀錄。以至緣覺・声聞、化現寶社、大士・散聖、殊塗同帰。覽者其自得、於掩卷之際、豈不警乎大哉。俾無為・無住・無修・無証、坐可窺天測海、而針芥相投、隨機任緣、得歡喜處。苟或不然、則一筆抹下、撥棄土壤、免使後人鑽龜打瓦。（「松隱集」卷二八—四丁左～五丁左）（静嘉堂所蔵本）

曹助（一〇九八—一一七四）の『松隱文集』四十卷に所収の一文である。『紹興伝燈（錄）』の名は、現在のところ目録等でも見ることができないが、二十卷も存したのであるからかなり大部なものといえよう。編者の嚴陵（浙江省の山名カ）惠真の傳は不明であるが、六たび大刹に住した人とあり、あるいは少し時代が早いが雲門宗の慧林宗本（一〇二〇—一〇九九）に嗣法した惠真であろうか、燈史類には目録に名のみ列し、蘇州（江蘇省）の天平・舒州（安徽省）の太平・江陰壽寧（江蘇省）に住したとある。統燈錄は壽寧惠真と太平惠真は、同名異人とするが、あるいは同一人かとも思われる。ただ嚴陵惠真とは別人のように思われ、今の

ところ不明である。注目すべき編集方法は、嘉泰普燈錄（一二〇二年）以前の紹興（一一三一—一六二）年間に、景德伝燈錄・天聖広燈錄・建中靖國統燈錄の三燈を承けて、普燈錄と同じようも、儒者・道士を含めて居士の比重が重くなっていることは、當時の禪風であると共に、慧林宗本系の雷庵正受（一一四六—一二〇八）の普燈錄と密接な関係にあることは指摘できると思われる。

（5）宗門会要序

宗門書自伝燈後、伝記日出。学者、既不能尽見、亦不暇周覽。閩人朋介石、為書曰宗門会要。根以統要、參以五燈、遠而古宿之代別、近而諸方之拈頌、旁而仏鑒・大円之法語、八方珠玉。一展卷、而燦焉在目、其惠後学、不淺矣。予嘗侍無準・癡絕二老、語及近世叢林、有書曰類要。頗便覽考。二老作而曰、古人活意、寄之言外、今指為実法、類而編之。他日必有指為故事用者。古人有靈、當不瞑目。今觀此編、初不区分類次、博而不煩、約而不略、惜二老不見之耳。大抵宗門之答問抑揚、皆自根本、而達枝葉。善觀者、當從枝葉、而及根本。今有人焉、未展卷時、機動眼活、則古人性命、皆懸于陳案旧牘、何地可着手哉。介石、朝勘夕較、積三十年、始為成書、檢閱編摩。其子徹侍者、寔侍其側、揚雄草玄、而童鳥不与、後世惜之、徹乎何止較昔人三步。（『柳塘外集』卷三一四丁左—一五丁左）（四庫全書珍本五集 駒岡032—20—1888）（参照「無文印」卷九）

無文道璨（一二七一年寂）の『柳塘外集』四卷に所収の一文であ

る。『宗門会要』といえば、大慧宗杲—懶庵鼎需—木庵安永と承ける晦翁悟明が淳熙十年（一一八三）に編した『宗門聯燈会要』三十巻を思い出すが、それではない。また『禪籍志』（大日本佛教全書卷九五—二四一c）、『山庵雜錄』卷上（統藏經卷一四八—一六四d）、『増集統傳燈錄』卷五（統藏經卷一四二—四二七a）にいう無準師範—断橋妙倫と承ける雪山疊編の『禪門宗要』十巻（現存せず）でもない。序文によると、大慧宗杲—仏照德光—浙翁如琰と承ける介石智朋の編になる『宗門会要』である。智朋には『介石智朋語錄』一巻が統藏經に現存するが、行状等は詳細にはわからないので、この書に関するることは述べていない。すでに論集の四・五号に述べた『(宗門)統要』を基本とすることは『聯燈会要』と同じであり、『五燈(会元)』や仏鑒慧勤（一〇五九—一一七）と大円遵璞の法語、『八方珠玉(集)』が参考にされ、三十年かかって徹侍者の努力により成ったものといわれるが、網羅的で便宜なものであつたものだろうが、分量などはわからぬ。その外現存しなくて内容不明の『(宗門)類要』に言及している点も注目してよいであろう。

『柳塘外集』には、禪者だけの伝ではないが、内容が不明で現在伝わらない『西湖高僧伝序』（卷三一五丁左—一六丁右）や大慧派の法系を増補した大慧宗杲の弟子の橘州宝曇編『大光明藏』三巻に撰した『大光明藏後序』（卷三一六丁左—十七丁左）がある。『大光明藏』は統藏經に收められ、五山版も存するが『柳塘外集』の跋はみられない。

〔参考〕書伝燈錄後

予久習仏乘、是知出世第一妙理。然終未了所從入路。頃居淮

西、觀楞嚴經、見如來諸大弟子、多從六根入、至返流全一、六用不行、混入性海。雖凡未可以直造仏地、心知此事、數年於茲矣。而道久不進。去年冬、謁伝燈錄、究觀祖師悟入之理、心有所契、必手錄之、冥之坐隅。蓋自達磨以來、付法必有偈、偈中每有下種開花之語、至六祖得衣法南邁、有明上坐者、追至嶺上、知衣不可取、悔過求法。祖誨之曰、汝諦觀察、不思善・不思惡、正恁麼時、阿那箇是明上坐本來面目、明即時

大悟、遍體流汗曰、頃在黃梅隨衆、實不省自己本來面目。今蒙指示入處、如人飲水、冷暖自知。祖知明已悟、教之善自護持而已。及內侍薛簡、問祖心要。祖亦曰、一切善惡、都莫思量。自然得入清淨心體、湛然常寂、妙用恒沙。簡亦豁然大悟。予釀卷歎曰、祖師入處、儼在是耶、既見本來面目、心能不忘、護持不捨、則謂下種也耶。譬諸草木種子、若置之虛空、不投地中、雖經百千歲、何緣得生。若種之地中、潤之以雨露、曠之以風日、則開花結子、數日可待。六祖常謂大衆、汝等諸人自心是仏、外無一物、而能建立。皆是本心生萬種法。因教之以一相一行三昧。曰、若人於一切處、不住相、於彼相中、不生憎愛、亦無取捨、不念利益、成壞等事、安閑恬靜、虛融澹泊、此名一相三昧。若於一切處、行住坐臥、純一直心、不動道場、真成淨土、此名一行三昧。若人具二三昧、如地有種、含藏長養、成就其実。我今說法、猶如時雨、普潤大地。汝等仏性、譬諸種子、遇茲沾洽、悉得發生。承吾旨者、法護菩提。

依吾行者、決証妙果。一相一行三昧、則治地法也。予至此復歎曰、祖師之言備矣。而人自不知、雖知、未必能行。如予盖知、而未能行者也。昔李習之。嘗問戒定惠於藥山。藥山曰、公欲保住此事、須於高高山頂坐、深深海底行。如閨閣中、物捨不得、便為滲漏。予欲書此言、於紳庶幾不忘也。凡諸方妙語、昔人有未喻者。予輒為釀之、錄之於左凡十二章。大觀二年二月十三日書。

仏說法、有一女人、忽來問訊、使於仏前入定。文殊師利近前彈指、出此女人定不得。又托升梵天、亦出不得。仏曰、仮使百千文殊、亦出此女人定不得。下方有網明菩薩、能出此定。須臾網明便至。問訊仏了、去女人前、彈指一声。女人便從定而起。穎浜老曰、有心要出此女人定、雖是文殊親托、往梵天也出不得。無心要出此女人定、一彈指便了。

僧問老宿、師子捉兔亦全其力、捉象亦全其力、未審全箇什麼力。老宿曰、不欺之力。穎浜老曰、師子捉兔時、亦全用一箇師子力、捉象時、亦全用一箇師子力。不為兔小象大、而有差別。若有差別、則物有大於象者、師子捉不得矣。菩薩斷取三千大千世界、置右掌中、如持針鋒、舉一棗葉、即此理也。僧拳教云、文殊忽起仏見法見、被仏攝向二鐵圍山。五雲曰、如今若有人起仏見法見、我與点兩椀茶。且道賞伊罰伊、同教意不同教意。穎浜老曰、摄向鐵圍山、令知起見知非。与他茶喫、令他識本來處。与教意異而不異。

保福僧到地藏。地藏和尚問、彼中仏法云何。曰、保福有時示衆道、塞却爾眼、教爾覲不見、塞却爾耳、教爾聽不聞、坐却爾意、教爾分別不得。地藏曰、吾問爾不塞爾眼、見箇什麼、不塞爾耳、聞箇什麼、不坐爾意、作麼生分別。或人問此二尊宿意、為同為不同。潁浜老曰、六根為物所塞、為物所坐、則不見自往(性力)、不聞自性、不能分別。自性若不為物所塞、則可以聞見自性、分別自性矣。老子曰、視之不見、名所坐、則可以聞見自性、分別自性矣。老子曰、視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、是三者、不可致詰、故復混而為一。一則性也。凡老子之言、與仏同者、類如此。

鄧隱峯、在馬師會下。一日推土車、馬師屏脚路上坐。峯曰、請師收足。馬曰、已展不收。峯曰、已進不退。推車直進碾、損馬師腳。馬歸法堂、執斧子曰、碾損老僧腳底出來。峯出引頸於前。馬師乃置斧子。潁浜老曰、馬師展脚、不收執斧、而問二者、皆以試驗。隱峯臨機見解耳、土力。土耳車進退於事、初無損益、而直推不顧。此隱峯狂直之病也。若執斧問之、而縮頸畏避、則十分凡夫無足取矣。猶能引頸而俟、則猶可取也、故其終也。不坐不立、倒立而逝。雖去来自在、而狂病、猶未痊也。南泉欲遊莊舍。土地神、先報莊主。莊主乃預為備。泉至問曰、安知老僧來、排弁如此。莊主曰、昨夜土地神相報。泉曰、王老師修行無力、被鬼神覲見。有僧便問、既是善知識、因何被鬼神覲見。泉曰、上地(土力)前更下一分飯。潁浜老曰、昔大耳三藏

自謂、得它心通。忠國師見而問之曰、老僧心在何處。大耳曰、在西川、看競渡。忠再問、心在何處。大耳曰、在天津橋、看弄胡孫。及三問、大耳良久。莫知去處。忠叱之曰、這野狐精、它心通在什麼處。仰山聞而糾之曰、前兩度是涉境心、故為大耳所見。後是自受用三昧、放大耳不能見。今南泉欲遊莊舍、而土地知之、亦見其涉境心耳。本無足怪者、南泉自謂修行無力。亦姑云、爾僧因其言而詰之、非識理者也。答之以土地前更下一分飯。蓋言前從後力皆涉境心耳。

仰山嘗謂第一坐曰、不思善、不思惡、正恁麼時作麼生。對曰、正恁麼時、是某甲放身命處。仰山曰、何不問老僧。曰、恁麼時不見有和尚。仰山曰、扶吾教不起。或曰、不思善、不思惡、此六祖所謂本來面目、而仰山少之何也。潁浜老曰、在周易有之、無思也、無為也、寂然不動。感而遂通天下之故、非天下之至神、其孰能與於此。無思無為者、其體也。感而遂通天下之故者、其用也。得其體、未得其用故、仰山以為未足耳。長沙岑和尚、嘗遺僧問同參會老、曰、和尚見南泉後如何。會默然。僧曰、未見南泉時如何。會曰、不可更別有也。僧回以告岑、有偈曰、百尺竿頭坐底一云試驗人。雖然得入未為真、百尺竿頭須進步、十方世界是全身。蓋亦貴其用耳。

香嚴閑師、嘗謂衆曰、如人在千尺懸崖、口銜樹枝、脚無所踏、手無所攀。忽有人問西來意、若開口答、即喪身失命、若不答又違問者如何耶。是衆無對。潁浜老曰、我若當此時、便大

開口答他西來意、不管喪身失命、管別有道理也。
 玄妙備頭陀謂衆曰、諸方老宿盡道、接物利生、只好盲聾啞三種病人、汝作麼生接。拈法堅弘^(拵力)、他且不見、共他說話、他且不聞、口復啞。若接不得、仏法安在。時雖有答者、備皆不肯。額浜老曰、三種病人、只用諸方拈搘堅弘說話等伎倆接他、真是奈何他不得。如諸仏菩薩、修行功到虎狼蛇蝎、崖石草木、無物透不得。而況三種病人乎。玄沙之意、儻在是耳、非一時老宿境界、故未有能道者耳。

德謙禪師、嘗到雙巖、巖長老問、金剛經云、一切諸仏、皆從此經出。且道、此經是何人說。師曰、說与不說且置、和尚喚什麼作此經。雙巖無對。師曰、一切聖賢、皆以無為法、而有差別、既以無為法為極則。人安有差別。且如差別是過不是過。若是一過切聖賢尽有過。若不是過、決定喚什麼做差別。雙巖亦無語。額浜老曰、仏本無經。此經者此心也。仏惟無心、故方法由之而出。若猶有心、一法且不能出、而況方法乎。四

果十地、皆賢聖也。其所得法、各有淺深、然皆非無心、則不能得。故曰、一切聖賢、皆以無為法、而有差別。如扁之斬輪、傴僂之承蜩、皆非無心、無以致其功、其以無致功、則與聖賢同、而其功之大小、則與賢聖異、賢聖之有差別。蓋無可疑者也。
經所謂以無為法者、謂以無而為法耳。非謂有無為之法也。然自六祖以來、皆說作無為之法、蓋僧家拙於文義耳。

杭州報恩院惠明禪師、庵居人梅山、有二禪客至。師曰、上坐離什麼處來。曰、都城。師曰、上坐離都城至此山、則都城少

上坐、此山剩上坐。剩則心外有法、少則心法不周。說得道理、即住。不會即去。二客不能對。又有朋彥上坐訪師。師問、一人發真歸源、十方虛空一時消隕。今天台巍然、如何得消隕去。朋彥亦無措。額浜老曰、仏身充滿於法界、普現一切羣生前、此理也。一人發真歸源、十方虛空一時消隕、亦理也。二理無可疑者、人能達此理、則去來之想、尽山河之礙滅、真性朗然、物莫能隔此。所以為充滿法異^(界)、消隕虛空矣。達者聞而信之、昧者疑之、則天台巍然、在前未嘗滅矣。

杭州永明寺道潛禪師、嘗訪淨惠禪師會。四衆士女入院。淨惠曰、律中隔壁聞釤鉶聲、即為破戒。見曙金銀合沓朱紫駢闊、是破戒、不是破戒。師曰、好箇入路。淨惠稱善。額浜老曰、隔壁聞釤鉶聲、而欲心動安得、不謂破戒、金銀合沓朱紫駢闊、而心不起安得、謂之破戒。〔樂城三集〕卷九——丁右八丁右
(四部叢刊 駒岡032—T12—202) (参照、靜嘉堂藏本)

蘇轍(1039—1111)の『樂城集』九十六巻に所収の一文である。大觀二年(1108)に書かれたものであるが、刊行を目的とした跋とは異なるが、士大夫の『景德伝燈錄』の読後感を示したものであるので参考にとりあげた。十二章にわたる蘇轍(額浜遺老)の著語といつてもよいであろう。十二章は、それぞれ一(卷二七、大正藏卷五一—四三六a)、二(同、四三五b)、三(同、四三六b)、四(同、四三七a b)、五(卷八、同、二五九b)、六(同、二五七c、卷五、同、二四四a)、七(卷十一、同、二八三a、卷十、同、二七四a)、八(卷十、同、二八四b)、九(卷十

八、同、三四六b)、十(卷二十三、同、三九二b)、十一(卷二五、同、四一〇b)、十二(同、四一二b)からの引用と著語よ
り成っている。

二語録類

(イ) 曹洞宗

(6) 般陽集序

往歲、守官鄭圃地、當孔道西游。釈子多所延接、問其所詣、
非五台即招提。招提西都道場、今芙蓉湖老人楷公、昔所棲止。
大善知識、徒衆輻湊、幾在台山、分受禮謁。其後遷寓東州、
機緣句偈、往往在人、風聲所臨、靡不歸嚮。于是臨淄趙侯、
摹公偈頌、號般陽集、詒書鄙人、請為序引。某早歲信道、老無
所得。究觀妙語、欲加形容、而悶乎情忘、嗒焉辭喪。夫与豹除
斑、未之能也、為蛇画足、豈其然哉。嗚呼、洞山之後、五世
而幾息、投子以來、一伝而大振、興衰天也亦由人歟。政和五
年十月望日。河間劉某序。(『學易集』卷六一一丁右左)(四庫
全書珍本別集 駒岡032—20—2287)

劉跂(一一八年頃歿)の『學易集』八卷に所収の一文である。

『般陽集』は芙蓉道楷(一〇四三一一八)の偈頌集であり、
内容は全く知ることのできなかつたものである。その著の存在
は、椎名宏雄氏によつて尤袤(一一二七一一九四)の私製の書
目である『遂書堂書目』より最近指摘されていた。ここにその序
文が出現することによつて、道楷示寂の少し前の政和五年(一一
一五)に序が書かれ、臨淄(山東省臨淄県)の趙侯によつて編集

された芙蓉道楷の偈頌集であり、『般陽集』の名も編者によつて
名づけられたことがわかるようになつたのである。般陽とはおそ
らく芙蓉道楷の晩年の活躍地の山東省淄川県の地名から來たもの
と思われる。道楷は筆者がすでに紹介した王彬の撰する「隨州大洪
山崇寧保寿禪院十方第二代楷禪師塔銘」が存すが、この塔銘は第二
の塔銘で、韓韶の撰になる第一の塔銘は現在不明である。道楷の
活躍した芙蓉湖は沂州の近くであるが、道楷が淄州に流罪になつ
た頃の偈頌を中心とするものであろう。東州が不明であり、また塔
銘のいう語録および『讀開古尊宿語要』に抜萃される語録との関
係はよくわからない。おそらく語録を含まぬ偈頌集であつたと考
えられる。

(7) 雪峰真歇了禪師一掌録序

自達磨流通、正法眼藏、如一燈分百千燈、以心伝心。雖法無
南北、而機有差別、其帰一也。雪峰了禪師、得法于丹霞淳、
淳得法于芙蓉楷、伝曹洞宗旨。門風孤峭、壁立千仞、有所施
設、皆被上機、非中下(根力)根器、所能窺測。了公自号真歇。了昔
演法于長蘆、今開席于雪峰。學徒雲集、從之者、常千五百余
衆。叢林之盛、所未嘗有。隨机提令、應病施方、有作者之鉛
鎚、真良医之藥石。一言一句、皆示空劫中眼目、非苟然也。
其徒集机縁語句、為一掌錄、以初得法由一掌故。錄成以示梁
谿・病叟。病叟讚歎、為說偈言。其一曰、真歇頰邊遭一掌。
大愚肋下築三拳。自從默契宗風後、顛倒縱橫總是禪。其二曰、
正令全提上上機。學人到此莫驚疑。直須吼裂野子腦。始是金
毛獅子兒。說偈畢以其錄歸之。因書其語、置篇首云。紹興四

年歲次甲寅二月朔序。〔「梁谿全集」卷一三七一一丁右一二丁右〕（静嘉堂文庫所藏本）

李綱（一〇八三一一四〇）の『梁谿全集』百八十卷に所収の一文である。この紹興四年（一一三四）になる序文については拙稿「大慧宗杲とその弟子たち（八）——真歇清了との関係をめぐって（承前）」（印度学仏教学研究第二十五卷第一号）で述べたように雪峰山時代の真歇清了（一〇八八一一五）の語録であり、従来知られている『劫外錄』ではなく、『一掌錄』が存し、『続開古尊宿語要』の抜萃は『一掌錄』よりなされたこと、また大慧宗杲（一〇八九一一六三）が默照批判をした当時の貴重な資料である点などを指摘しておいた。『嘉泰普燈錄』などを整理することによって一部復元の予想ができる『一掌錄』の内容検討は別の機会にしたいと考えている。

（8）大陽明安禪師古錄序

夫、功以漸修、道由頓悟。漸修匪易、頓悟匪難。一宿九年、非久非近。憶昔我世尊、憫仏子等、歷劫漂沉、周廻生死、開大法門。極力拯救、揩磨積習、令不退転。垢盡明現、始見本原、猶在護持。然後純熟、今一世人、無勇猛心、及堅固力、口耳所伝、未証為証、墮落虛空、無棲泊處。又有甚者、習氣未除、淫慾貪嗔、自謂無礙。流轉苦海、永無出期、由世導師、輕談空寂。遂令末學、迷真逐妄、不亦悲乎。大陽明安延公禪師、洞山玄孫、梁山嫡子。真得仏祖、所付心印、事理兼融、開遮自在、機鋒覲面、坐斷乾坤、至其出力、接引後學。惟恐學人、或墮邪見。防閑開譬、具仏慈悲。洞山以來、家風不墮。

真歇老人、出示古錄。一語一句、具真實法。雖非即此、可以伝授。亦非離此、而能證明。与近世師、繫風捕影、疑語後学者、異日道也。因書扁首、廣衍流布。所期學者、勿信口耳。不忽所易、不倦所難、端的不差、証無上道。紹興癸丑六月朔旦。東山居士序。〔「毘陵集」卷一〇一七丁左八丁右〕（四庫全書珍本別集 駒岡032—20—2307）

張守（一〇八四一一四五）の『毘陵集』十六卷に所収の一文である。この紹興三年（一一三三）になる『大陽明安禪師古錄』の序については、同じく前掲の論文で述べたものである。大陽警玄（九四三一一〇一七）の語録といつても、真歇清了と関係深いもので、真歇によつて洞上の宗風が大陽を通して挙揚された時に成立したものであろう。

（9）雪峯慧照禪師語錄序

慧照預禪師。提如來密印、坐大洪山、孤峯頂上、転大法輪。文字性離、言語道斷、超仏越祖、心如太虛。至于隨緣應機、接引調伏、如太医王、対病与藥、金毛哮吼、百獸皆瘡。建炎以来、襄漢莽為盜區、赤地千里、大洪屹然、其間豺虎、環視垂涎、而不敢犯道俗、依師獲免者、殆數千萬人。夫豈偶然也哉。余帥甌閩、始挽師來、乾元繼主雪峯、與其弟了、住相後先。宗風大振、道價益高。門人以師前後言句示、余歎曰、昔聞丹霞淳、而不及識、乃識其三子。師蓋嫡嗣也。次即了、住永嘉之龍翔。其季竟、住四明之天童。一家三傑、皆為東南大導師。聞者奔趨。見者厭滿。所至坐下、常千余衆。凡經印可、

便為叢林、竜象亦盛矣哉。慧炬所燭、昏霾自消。猶且開方便門、以無說說、普度一切。無絃琴上、品就宮商、白玉田中、種成桃李。即見與聞、而自悟入。豈無其人邪。紹興八年歲在戊午二月晦日序。(「毘陵集」卷一〇一八丁左~九丁右)(四庫全書珍本別集 駒岡032—20—2307)

前文の序文と同じく張守の『毘陵集』に収められた『雪峰慧照禪師語錄』の序文であり、紹興八年(一一三八)に成立している。雪峰慧照禪師(一〇七八—一四〇)は諱を慶預といい、芙蓉道楷(一丹霞子淳と承ける子淳の弟子であり、宏智正覺(一〇九一—一五七)や真歇清了と同門であり、この序文については同じく前述の論文で述べている。また『湖北金石志』卷十に所収される「隨州大洪山第六代住持慧照禪師塔銘」についての内容紹介は『攻媿集』にみられる禅宗資料——投子義青を中心として」(東方宗教第三十九号)で行い、曹洞教団の発展の役割について簡単に述べておいた。

(10) 韶雪屋詩集序

雪屋入天童室、已參活句。晚入康山、宴坐絕頂。一足不印人間地、乾坤清氣、尽入其手。無怪乎詩之清而活也。予与雪屋未即一日雅、大雪沒屋行、吟梅花樹下、甚想見其人。頃游吳越間、見所刊兎園集、反覆閱之、不無毫髮遺恨。欲告雪屋未能、今觀此編、前之遺恨者、毫髮不存。豈雪屋晚年所見、亦予暗合邪。詩至於清、而止於活。清之失也癯、活之失也放。此近日詩家、大病無他、學不勝才、氣不勝識、理不勝詞。故

未得其真、先得其似耳。學也氣也理也、難与今之有唐声者言也。雪屋大肆其力於是三者久。故清不癯、活不放、黎然有當於人心。嗚呼、微雪屋、吾將誰與論哉。(「柳塘外集」卷三一五丁左~六丁右)(四庫全書珍本五集 駒岡032—20—1888)(参照「無文印」卷八)

道璨(一一七一年寂)の『柳塘外集』に所収の一文である。雪屋正韶(一一〇一—一二六〇)は天童如淨(一一六三—一二二八)の嗣法の弟子で、日本の永平道元と兄弟弟子である。正韶の伝については道璨の『柳塘外集』卷四に所収の『天池雪屋韶禪師塔銘』に詳しい。中国人の如淨門下の行状が全く不明である中に、この正韶のみ塔銘が知られ、その中に如淨の宗風が述べられることは、すでに早くから注目されていたのであるが、残念ながら正韶の宗風を知る具体的な語録類は伝っていない。ただこの序文によつて如淨の宗風を継ぎ、詩文に巧みであったことがうかがわれ、しかも此の詩集が再編される以前に、不備な点も存したとする『兎園集』が刊行されていたのである。このことは塔銘にも指摘されるが、その詩偈より正韶の人となりが想像されたという。

(ロ) 雲門宗

(11) 蘇州承天寺永安長老語錄序

余昔遊江南、上下廬山、西走泐潭、造黃蘖、傍淮上歷訪諸祖道場、出金陵、還吳越、大底江南、名為達者。余皆已知之矣。後二年、之荊州。荊州尤多古精舍。余嘗觀古記所載、名德碩老、多出于荆·衡·襄·漢之間。余在澧陵最久。澧陵一障、乃有夾山·梁普·欽山·龍潭·層山五大寺、南臨蘿山、北望

玉泉、聯延不絕、當其盛時、海會山積上下、皆數千百人、地勝勢劇、至子今承嗣不衰、為其師者、莫不推挾其人。余既從江・吳・淮・楚之士、相與往來、蓋已多矣。然其可者、纔二三人、古人有言、如沙中金、不其然歟。夫太陽之昇于天明者、視其出沒中昃、豈不坦然哉。至瞽者、待相而後知、與明者、固亡別矣。明与瞽易識、知与否難言、此叢林、所以紛紛也。維摩大士、神通自在。其說雖多、然不可刪。世之學者、枢機一發、便使人掩口、不暇已可厭矣。蓋其心有達不、而言無多寡。世之人、獨知蹈襲、右人言辭應對、亹亹如影響之相符。以為其功願、何異於數寶者哉。不惟不充於外、其中乃惘惘爾、悠悠爾、至於達者、則不然也。永安禪師、名崇智。吳人張氏子。初受具、即出遊諸方、先受記囑、心智默了。遂為五祖戒禪師之嗣。戒師者、先雲門三世孫也。既獲五祖印可、乃東歸于吳。

初住文殊、還永安。師為吳人、而繼主吳二道場。其行乃自弱齡、至於耄老、有足伏人者。不然豈其州人推尊之哉。一日弟子崇章、出其所以、開示於人。若弟子者、為大軸囑客、不遠千里而來、請余為序異哉。余豈知之者歟。昔如來以正法眼藏、授大迦葉。蟬聯蠶緒、以伝于今、為仏為祖、豈一人哉。然迦葉、不能知世尊三昧、況其他乎。了則為得、昧則為失。所以為難者、非特在機弁也。余方在朔野沙塵之中、延首以望居。以不得一接其風味為恨。古人所謂、說尺不如行寸。余觀其言、與放其行、豈特尺寸之間也。若夫陟高坐運、象牙奪無辱之一弁、

伏六道之土。余不得而問之矣。是斯錄矣、所謂扣宮而宮應之、隨機之義如是而已。余欲見其人、以是觀之、亦何必在名山古刹之下哉。崇章所傳甲乙次第如右。治平丙年玖月拾柒日序。
 〔沈氏三先生文集〕卷八—三丁左（五丁左）（四部叢刊續編駒岡
 032—17—136）
 沈遘、沈括（1029—1093）・沈遼（1033—1085）
 の『沈氏三先生文集』六十一卷に所収された一文で、沈遘の弟の沈遼の『雲巢編』十卷の内に当る。『蘇州承天寺永安長老語錄』については名前が知られないばかりか、諱が崇智で、雲門宗の雲門文偃・双泉師寛と承ける五祖戒の弟子であることも燈史類では知ることのできない人である。序文は治平二年（1065）に成り、崇智の弟子の崇章の働きかけにより、伝と語が伝わったとしているが、残念ながらその内容は知ることはできない。この序文によつて簡単な崇智の伝記が知れる。

(12) 福州西禪暹老語錄序

仏以無文之印、密付摩訶迦葉、二十八伝、而至中夏、初無文字言説、可伝可説、真仏子者、即付即受、必有符証、印空同文、於其契会。雖達磨面壁九年、實為二祖鑄印。若其根器不爾、雖親見德山棒、如雨点付与、臨濟天下雷行、此印陸沈終不伝也。今其徒所傳、文字典要、号為一、四天下品、尽世間竹帛、不能載也。蓋亦如虫蝕木、賓主相當、偶成文爾。若以為不然者、今有具世間智、得文字通者、自可閉戶無師。讀書十年、刻菩提印、而自佩之矣。故曰、神而明之存乎。其人

苟非其人、道不虛行。怡山道遯老、初寄瓶鉢於古田、時人不識也。曾福州子固、拔於稠人之中、授以西禪、而道俗皆與之。

團蒲曲几、於今十二年矣。遯之徒淨円、以其言句、求予為序引。予問淨照禪師、以為其人有道心、知子莫若父也。聞予此言、必不驚也。至於錄開堂升座之語、以統祖燈、則其門人之志也。（「予章集」卷一六—三三丁右～三三丁右）（四部叢刊 駒岡 032—T12—204）

黃庭堅（一〇四五—一〇五）の『予章黃先生文集』三十卷に所収された一文である。黃庭堅は『嘉泰普燈錄』卷二十三に伝があり、晦堂祖心（一〇一五—一〇〇）に嗣法した居士としても有名である。西禪道遯は慧林宗林—長蘆崇信と承ける雲門宗に属する禅者であるが、伝記も全くわからない。福州で活躍し、西禪や怡山に住したのであろう。淨照禪師は長蘆崇信のことであり、黃庭堅は師の崇信とは交渉があつたとするが、道遯とは直接にはなく、道遯の弟子の淨円が序文を求めた時に応じたものである。開堂語や上堂語を編集したものであるが、分量や内容は不明である。

(13) 印禪師語錄序

雪寶古道場、住持多名人莫盛。於明覺禪師重顯之時、四方衲子、爭走席下、如仏出現、因以得法甚衆。顯伝天衣義懷、懷伝淨慈宗本、本之所伝、不知其幾。而四明慧印、實為嫡嗣。嗣法以來、五遷大利。蓋嘗即明覺之丈室而居焉、光統祖燈、紹隆勝會、縱無礙弁談不二門。有時截斷衆流、莫測其所以異。

有時隨波逐浪、莫測其所以同。聲妙在於機先、聞聞廻超於言外。非昔雪寶、是昔雪寶、是今雪寶、非今雪寶。泯然三世、悉歸一印。印乎印乎、文彩已彰、不可得而掩也。覽者得之。

（「道鄉集」卷二八—一〇丁左～一〇丁右）（静嘉堂文庫所藏本）

鄒浩（一〇六〇—一一一）の『道鄉集』四十卷に所収される一文である。四明慧印は『建中靖國統燈錄』卷十五では、湖州道場山に住したとあり、雲門宗の雪寶重顯—天衣義懷と承ける淨慈宗本（一〇二〇—一〇九九）に法を嗣いだ人である。湖州道場山は十刹の一つであり、雪寶山にも住したと思われ、五大刹に住した語錄が存したのであろう。

(14) 仏鑑大師語錄序

仏以無心、通達一切法、而以一音、演說之。故法法皆心、說說皆法。半字滿字、有離有解、有假名字、而無一物。四句百句、千万億句、乃至不可說那由他句、其字有盡、而義無窮。始自四十二章西來、而仏書遍中國、能言之類、無以復加、如經所說、山河大地、皆是菩提、燈発勞相、譬菩提心、為一大鏡。而山河大地、一切衆生、草木根芽之類、皆清淨本然、中所現物。故隨取隨用、而其取其用、皆不外吾鏡中、則其能以無心通達。而一音演說、字有尽而義無窮、能言之類、無以加、豈不以此哉。然仏以無言言、故如刀画水、如空中鳥跡、過不可尋、而昧者、欲求画于水、求跡于空。故觀一藏教、如大海普雨、而欲以淺智、悉數其滴、至不可得。則生迷悶于千万億句、計常計斷、見中見邊、如步屈虫脚、移後躡前、終不得捨。

而曾不知反滴為海、則千万億句、画亡而跡失。有大智人菩提達磨、具仏知見、愍此世且為教所縛、而來解之。最初一語、廓然無聖、有求心了不可得者、即以付之。故面壁不立文字、而一藏教咸露、無余仏音・人音・鳥音・獸音・一切風水百物之音、是音皆說、是說皆義、乃至牆牖棟柱、無說亦說、隨其根性、使各悟入。如是解脫無量之衆、譽五百比丘、各有悟門、言人人殊、而仏告舍利弗、以彼皆正說、無揅詐也。粵有仏國禪師白公、天衣懷公之裔孫、法雲秀公之嫡子、提祖師印、為一切雄。而仏鑑大師惟仲、又仏國之嫡子。始從仏國悟庭柏義、即獅子吼、尽眼色界、隨類拈出、物皆金色、而仏國不作如是言、仏鑑亦不作如是解也。或舉庭柏義問者、則曰莫誘我。師然青青滿前用亦不尽。既往金山龍游道場、皇帝數遣使降香。

學者雲集、震于江南、會補之至金山。師傾蓋欣然、語以家弟、無極宰說之宗旨、夙契嘗赴、初請桃園鼓山亦以補之。于道有少分、因出門人、次集語錄、求為序引、補之聞之。昔仏一時、取恒河岸一葉、告諸比丘、我所覓了、一切諸法、如大地草木、為衆生說者、如手中葉。仏以為葉葉、皆舉累劫不尽。故舉一葉使自趣入。而縛於教者、始葉葉而求之、非祖師、具仏知見、則安能不立一指、而盡仏之蘊無有余哉。知此則如來祖無異禪也。故因仏鑑語錄而伸之。（「東堂集」卷二〇一四丁右~六丁右）

（四庫全書珍本初集 駒岡032—20—265）

毛滂の『東堂集』十巻に所収の一文である。『仏鑑大師語錄』と

は、仏鑑慧慤（一〇五九—一一七）や無準師範（一一七八—一一四九）の語錄ではなく、金山惟忠の語錄である。惟忠は雪賀重顕・天衣義懷・円通法秀と承ける仏國惟白の弟子である。惟白は『建中靖國統燈錄』などの編者で、惟忠の伝も統燈錄卷二十五に付されており、語錄は希式が統燈錄の場合には記録したとしている。惟忠の晩年の伝記は不明であり、語錄が存したことも知られていないなかたのは、統燈錄をみると潤州金山龍游寺に入寺開堂したのが、建中靖國元年（一一〇一）四月十一日のことであり、統燈錄の編集の年に当るからである。その後の燈史類は臨濟系に重点が置かれたために、雲門系の禅者について伝えることが少くなつたのである。建中靖國元年四月十三日には皇子韓國公頭の満才の誕生日の祝聖上堂が記録されているところをみると、統燈錄の入蔵にも影響を与えた人と思える。

（八）臨濟宗黃龍派

（15）慶禪師語錄叙

禪師昭慶、示寂既二十年。門人德岑、乃以語錄、屬予曰、吾師出世、自高郵之乾明、至揚州之建隆、凡三作持、自熙寧之癸丑、至元祐之己巳、凡十七年。其語蓋不可勝、錄今所存者、止此亦足、以行諸方、而導後學、世之公卿大夫士、即丈室而親炙之者多矣。如高郵孫莘老・秦少游・括蒼龔深之・會稽陸農師・金華俞秀老、尤其顯者、今皆亡矣。為之序者、非子其誰。曰、予頃教授揚學獲從禪師游。每見為儒者說儒、為仏者說仏、為老者說老、以至天文地理之占候、百工衆技之制作、靡不隨其人而應焉、如千水月、如万竅風。嘗試以精粗期之、而了不

可得。豈所謂橫口之所言不知彼我之是非利害者歟。豈所謂喙鳴合与天地為合者歟。蓋惟忘言、乃能得之。雖無此錄可也而況序乎。岑笑曰、子其為之。〔道鄉集〕卷二八一八丁左九丁

左) (静嘉堂文庫所蔵本)

鄒浩(一〇六〇—一一一)の『道鄉集』四十巻に所収される一文である。建隆昭慶(一〇二七—一〇八九)は黃竜慧南(一〇二一—〇六九)の弟子である。昭慶については叙文中にみえる秦觀(一〇四九—一〇〇)字は少游が、その著『淮海集』巻四十に『慶禪師塔銘』を撰して、詳伝がわかる。ただ語錄が編集され、序が付せられたのは、示寂後二十年とあるから、大觀二年(一一〇八)の頃で、昭慶の門人の徳岑の働きによるのである。熙寧六年(一〇七三)から元祐四年(一〇八九)八月十六日の示寂までの十七年間の語は多くあつたであろうが、そのすべてではないといつてよい。

(16) 磯禪師語錄序

天下大禪円璣、透黃竜閨、縱獅子吼、不離當處、坐斷十方、胡來漢來、自隨鏡現、休去歇去、未免冰消。有時打鼓升堂、聊且逢場作戲。彼心有眼、正眼奚彰、惟眼無心、真心獨契、過此以往孰得。而名長老正捐、乃師嫡嗣、知予頃歲一宿、円通謂非偶然。勤以序請、事不獲已、序如此云。〔道鄉集〕巻二八一十丁右) (静嘉堂文庫所蔵本)

同じく鄒浩の一文である。三祖法宗も黃竜慧南の弟子であり、統

燈錄卷三や普燈錄卷四に上堂語が記録されているが、伝記や語錄についてはよく知られていない。三祖山は舒州(安徽省)であるが、この語錄は乾元後錄とあるから隆興府(江西省)の時ものであろう。

(18) 東林集叙

律教之設、潔人之汚、束人之肆、使人承戒自省、常若神明、陰在其旁、檢察其不如法者、人非世習、不能攻其環衛。輒蹈其舍、故人之於道也。自其靜一、而悟入未能劫、於瞬息一言頃而得之。或為嗜慾中敗、而或老死於勤苦無所見者、蓋其進之也久、則乘之者、得間焉。仏以是未之至也、復為禪教引物、

には見い出しができない。

(17) 宗禪師後錄叙

而感悟之。開堂升坐隨問、而應迅機激電、妙談齧鏹、而或寓之、形容之間、声氣之表、示人莫窮、壁立方仞、而學人者、豈易得哉。當如飢鷹伺肉、游魚見餌、俄而取之、已吞而潛、已擎而舉、或者猶求餌肉之所在、禪之為教、不亦至乎。自非人我兩喪、而會於道、形骨俱融、纖毫不染、不能隨感而應、隨應而悟焉。性空之中、少為形物、蝕其明而玷其瑩、則遂留滯落着。其機不足以發、其極不足以運、其鋒不足以斷、則問者烏能取、應者烏能用哉。蓋世人之於道、有見而知之者、有聞而知之者、未必皆有受道之質、行道之志、是知而已。此尤不可以多得。或者非實有所見聞、竊仏之言而駕之、以敏速欺罔後學、此又其末流也。然而學者、果欲知之乎。以其利害、探其所養、以其死生、觀其所操、則其情偽見矣。照覺禪師、予同郡人、從黃龍遊、嗣第十四代。升堂演法、有臨濟・慈明之遺風、門人錄其語、以序屬予。予與師未及相見、得其語錄而讀之、所謂迅機激電、妙談齧鏹、人我兩喪、而會於道者也。不知學者、有如飢鷹伺肉、游魚見餌、俄頃而取之者乎。觀文王公、以為東南道法之冠。豈虛言哉。始遊寶峯、起應東林之命。惠遠法師、常言、七百年後、當有肉身大士。更吾道場東林、始以律居、蓋自遠公而後、其教廢矣。會今天子詔改禪寺、而師適來為第一代、演法以遠之所望、而考其人以遠之所期。而推其數、皆無戾者。然則師之作、其天人之会歟。始者諸公迎師於泐潭、避命而逃之、走五百余里、而後得師於清江山谷。是

豈得已而求為之者邪。其言蓋為應物而設、推吾為仏之余、以遺其類者也。嗚呼、世之觀是錄者、能以耳視而目聽之、庶幾有逮焉。〔「演山集」卷一九—四丁左—六丁左〕（四庫全書珍本初集駒岡032—20—259）

黃裳（一〇四四一一一三〇）の『演山集』六十巻に所収の一文である。東林常総（一〇二五一一〇九一）は黃龍慧南の弟子であり、序文中にもみえるように廬山の東林寺は律寺であったが、詔によって禅寺に改め、常総が第一代となつたのである。常総の伝記は、『演山集』巻三十四に『照覺禪師行狀』が所収され詳しいが、『禪林僧宝伝』巻二十四の伝とは没年を一年異にするが、『釈氏疑年録』により僧宝伝の説をここではとり、今後の研究に待ちたい。行状の中に「泐潭・東林の語錄・偈頌、已に世に行わる」とあるから、行状が書かれた時点ですでに刊行されていたことがわかる。ただこの序文は『東林集』として泐潭時代の語を含んでいて、行状に述べる語錄との関係はよくわからない。常総はその弟子に蘇東坡（一〇三六一一〇一）や楊龜山（一〇五三一一三五）を出したことでも有名であり、行状の紹介と共に今後の研究の課題であろう。

（19）雲居祐禪師語錄序

仏言、我於一切法、無執報得常光一尋身真金色、乃至三十二大人相八十種隨形好、一一皆對妙。因固知釈迦老子、不會袒師禪。今有人交頭土面、而種種光明遍照。卑湿重遲、而進道猛利、超過百万阿僧祇劫。哆哆啞啞、而法音如雷如霆、慧弁如雲如雨。跛跛挈挈、而十二時中、遍往十方國土、調伏衆生。

如來油花脫子全無用處。不可是超仏知見、倒用如來印也。此語若伝山北山南、必且懷疑起諍、若問是誰、但向道、是雲居祐老子。若有人問言句内識此老子、言句外識此老子、不可道、不即言句、不離言句、對諸方、說如來禪也。我觀此老子、雖不設陷虎之機、大空升堂、小空入室。雖不結羨魚之網、烏鵲遷巢、龍蛇避宅。子湖狗口裏、刺得手、祕魔巖又下、有出身路。所以鏡有山鬼之形、妙於不見骨、銜波旬之鱗、本自無瘡。若人信得及、万株杉裏、方藏影。若信不及、五老峯前、又出頭。此老子是無為無事人、何須鄙。夫百千偈贊、諸人還會麼。巨鼈莫戴三山去。吾欲蓬萊頂上行。〔『予章集』卷一六一一九丁左～三〇丁左〕（四部叢刊 駒岡032—T12—204）

黄庭堅（一〇四五一一〇五）の『予章集』に所収の一文である。雲居元祐（一〇三〇—一〇九五）も黄龍慧南の弟子であり、慧南下のすぐれた禅者の語録が大変に散逸していることがわかる。元祐の伝記については『禪林僧宝伝』卷二十五に詳しいが、語録の存否については『建中靖國統燈錄』卷十三の伝とともに言及していない。

（20）宗禪師語録序

諸聖伝心、不由文字、從來建化、咸立門庭。蓋言為道詮、執之則為大病。語乃聲法透得、方具少分。則夫言亦末矣。四祖宗禪師、黃龍心之嫡子、臨濟玄之裔孫。學最上乘、悟第一義。徧參尊宿法席、帰住四祖道場。雄啓度門、明揚政令。雖洪鍾巨震、固嘗動地雨花、然古澗寒泉、飲即喪身失命。至于拈槌

拳唱、斯弁宣揚、門人記為後錄若干卷。己^(丑カ)孟冬、具門人義和、携以示予求序、冠其篇首、勉為書、此幸無詣焉。（「柯山集」卷四〇—一四丁右左）（武英殿聚珍版書 駒岡032—T14—766）

張耒（一〇五四一一四）の『柯山集』五十卷に所収の一文である。四祖宗は蘄州四祖山（湖北省）で活躍した人であろうが、

黄龍祖心（一〇一五一一〇〇）下では見当らない。黄龍悟新（一〇四三一一一四）は死心と号したから黄龍死心の弟子では寧国道宗が普灯錄に名のみ知られている。寧国寺は楚州（安徽省）に存したようで、張耒の出身が楚州淮陰であるから、道宗の語録であったと考えてよいであろう。『黄龍四家錄』の一つに禾山惠方（一〇七三一一二九）の語録があり、惠方は道号を超宗といい、同じく黄龍死心の弟子であるが、比較的詳しくわかる惠方の伝では、四祖山に住したとはないし、語録も四祖山の記録もなく、もちろん語録中に張耒の序もない。故に惠方の語録と考えることはできないであろう。この序文の成立は「己^(丑)孟冬」の「己^(丑)丘」は人名とは読めないので「己^(丑)丑」の誤りとすれば、張耒の生没年からみて大觀三年（一一〇九）であろう。張耒に序文を求めた門人の義和についても全くわからない。

（21）仏印清禪師語録序

崇寧間、余侍先公太師、守官京師。時仏印清禪師、住相國之智海、道價特高、學者雲集。先公暇日、多造其室。余亦侍行、辱知照甚厚。至大觀庚寅歲、禪師遷化。賜塔名曰、真寂之塔。先公為之作銘。有曰、水滴漚生雲收月白、都城東郊塔有真寂者、銘文之卒章也。後三十年、歲在戊午、余寓長樂、有前住

襄陽双池道腴長老、來謁出禪師語錄二卷、將刊板、以伝叢林、求我為序。追念智海游從、恍如昨日、已閱一世、悵歲月之易、汎悼然知識之不可見也。覽讀愴然、因序之曰、禪師法名、

智清。俗姓葉姓氏。泉之同安人。年二十有二出家、受具戒、即知有向上事。徧游諸方、參問宗旨、最後見道林佑禪師、舉幡風非動、仁者心動、風鈴不鳴、我心鳴耳之語。因展鉢次、

有所悟入、以頌呈祐。祐不可其所見、亦作頌以印証之。自此

机鋒迅發、禪苑歸仰。初住蘄州五祖山、法會之盛、震于江淮。紹聖中、智海虛席、有旨命禪師住持。再召入禁中、對御陞座、

舉楊宗風、賜號弘印。侄五祖・智海、合二十余年、今此所錄、皆禪師平日升堂入室、接引學者、機機語句、發明心地法門、

開示弘祖言意、可以利一切、而傳無窮者也。余嘗觀弘祖以心伝心、無文字相、不已而有言句、所以安心治病者、何其簡易也。去本既遠、派別支分、伝法者、拈花摘葉、務為新奇、以

相眩惑學道者、口習耳剽、遁相模倣、以為飽參、千差萬別、

不勝其繁、而此道日益微矣。禪師語句、自胸襟流出、不事離琢、而自然成父^(文カ)、不說義理、而自然契道。会歸有極中邊、皆

甜足以發明弘祖之深心、開導後人之正眼。余知此錄之流行、有補學者、蓋不可為量數也。道腴行年、將七十、以門人之故、久要不忘、能使此錄復伝、于禪師示寂三十年後、亦可謂賢也矣。與大今之士大夫交游之久、以信義相期、一旦臨小利害友。

若不相識者、不可同日而語也、勉作序、以塞其請、蓋亦有感

于此、至禪師之所履、勉踐施設、則先公所作塔銘、道之誌矣。此不復云。紹興八年十一月三日序。〔梁谿全集〕卷一三九十三

丁左（五丁左）（靜嘉堂文庫所藏本）

李綱（一〇八三—一四〇）の『梁谿全集』に所収の一文である。序の撰述は紹興八年（一一三八）である。雲居元祐に嗣法した弘印禪師は哲宗（一〇八五—一〇〇即位）より賜った禪師号で、諱は智清といい、示寂は大觀四年（一一一〇）である。繞燈錄卷二十一に語錄を収めるも、建中靖国元年（一一〇一）の入内の法語などが中心で、特に晩年の記録は不明である。序文によると語錄は二巻本であり、示寂後三十年して、七十才となつた門人の双池道腴が刊行に努力して成立したものであり、道腴については全く不明である。また智清の行状を記した塔銘も以前に存したらしいが現在伝わらない。元祐・智清の師資共に語錄が不伝であったことになる。

（22）慧和尚四会語錄序

師諱居慧。吳興人。俗姓吳。早歲習天台教已、而更復入叢林、從甘露長靈卓公得道、尋出世為人、閱四名刹。曰、天聖。曰、靈名山崇因。曰、何山宣化。曰、道場山護國。既示寂、門人道枢、集四會演暢語句成編、俾信士刊行散施、開悟後學、屬余序之。余嘗謂釀迦之親付飲光、單伝心印、不立文字、謂之教外別傳、是不容聲矣。然從上祖師、一時言言、流傳世間、已既甚多、為有言耶、為無言耶。世尊良久、外道得入、既不在言語有無之間、亦不離言語有無之間。或曰、此有得焉、則知

從上祖師与師之心一也。師住道場最久、學徒四集、觀其與人處、傾困倒廬、無所蓋藏、老婆心、且於是為至。古德云、尽大地是解脱門。把手拽不入師意、直欲出一隻手、一時拽入耶。余恐得入者、并門失之、是乃師之意也歟。紹興二十七年二月十日、太簡老人劉某序。(「苕溪集」卷二四一八丁左~九丁右)(四庫全書珍本二集 駒岡032—20—653)

劉一止(一〇七八—一六〇)の『苕溪集』五十五卷に所収の一文である。居慧(一〇七七—一五一)は黃龍祖心—黃龍惟清と承ける長靈守卓(一〇六五—一一三)に嗣法した人である。普燈錄卷十三に伝があるも語錄のことは述べない。この序は紹興二十七年(一一五七)に撰述され、天聖・靈名(石か)山崇因・何山宣化・道場山護國の四大名刹に住した語錄を門人の道枢(一一七六年寂)が編集したものである。あるいは福建省と考えられる崇因の住所は不明であるが、三刹共に生地の吳興つまり湖州(浙江省)であるから、住持地は四刹共に生地に近い所かもしれない。

(23) 福州仁王謨老語錄序

予旧観東坡南華寺詩意、明上座、非凡僧。後二十年、始識之於姑熟隱淨方丈。時夢堂新成、尚虛数与予偶坐堂上、味其言、非凡僧也。其後退居堂中、故衲子多以夢堂称之。自是諸子得髓得皮、名滿四方矣。紹興乙丑、偶居福之仁王、謨公始來補處、是刹相從五六時間、叩之益深、真夢堂子也。夫祖意不立文字、然非言句、無以顯機、亦無以觀、來學与奪之柄、正在於此。從上祖師古尊宿、拈頌代別、的有深旨。謨公早得夢堂

不言之妙、而嘗學詩於郭祥正・李端叔、二俱不立、自成一家。故其語言三昧、超出有無、諸方所不及焉。侍者元嗣、錄其上堂小參問答之語。請敘於予。予老病不能為文、姑述其父子相知之旧授之。(「筠谿集」卷二二一〇丁左~一一丁右)(四庫全書珍本二集 駒岡032—20—278)

李弥遜(一〇八九—一五三)の『筠谿集』二十四卷に所収の一文である。仁王謨は普燈錄に名のみ見え、靈源惟清の弟子の上封本才に嗣法したことになっており、大心謨ともある。この序文にみえる姑熟隱淨方丈やそこに新しく建てられた夢堂に因んだ仁王謨の師に当る人と思われる人が果して上封本才かどうかについては不明である。詩を学んだ郭祥正は普燈錄卷二十三に出ている白雲守端(一〇二五—一〇七二)に嗣法した居士であり、李端叔とは姑溪居士の李之儀のことであろう。語錄の編者の侍者元嗣については詳しいことは不明である。

(24) 持老語錄序

持禪師。明州鄞人。世為士、一旦棄髮鬚學仏、得法於白牛鄉。初住余姚法性、數年忽謝去、越牧欲以雍熙邀、致疑不就、試一問之。師欣然曰、願即得檄、牧大喜。師懷負包笠、即日徒步入院。秉節如金石、說法如雷霆。雖從之遊者、不過四五十輩、而名震吳越。尽交一世名鄉賢大夫。予先君會稽公、知之最深。予時甫數歲、侍先君旁、無旬月不見師、至今想其抵掌笑語、瞭然在目前、夷粹真率、真山林間人也。後又徙居雪竇・護聖二山、年德益高。如徑山杲公輩、皆以丈人行尊事之。其滅也

談笑如平時。蓋以真率為仏事者耶。得法弟子、子詢・行光・如寂・広懲、或出世說法、或遁迹衆中、皆不幸早逝去。而法揚用璋、獨在揚。於是亦住護聖、歸然為叢林。耆宿璋老、且病猶自力刻師語錄、且合辭屬予為序。師可謂有子矣。予以先君故、不敢辭。淳熙六年五月二十五日、山陰陸某序。（『渭南文集』卷一四一八丁右／九丁右）（四部叢刊 駒岡032—T12—222）

陸游（一一二五—一二〇九）の『渭南文集』五十巻に所収の一文である。雪竇持は東林常総・象田梵卿と承ける人で、その弟子等の名はすべて燈史類では知ることはできないし、持についても法揚用璋についても伝記的なことはわからない。陸游は『嘉泰普燈錄』に序文を撰した人で、多くの序跋を残している。

(つづく)

一九七七・七・七

付記 この論文を再校正する時に、椎名宏雄氏の「『傳燈玉英集』の基礎的考察」（曹洞宗研究員研究生研究紀要 第九号 昭和五十二年九月）の論文を読んだ。一の(3)に関連する事項であり、あわせ参照されたい。